2024日本自動車殿堂 歴史遺産車

日本の自動車の歴史に優れた足跡を残した名車を選定し
日本自動車殿堂に登録して永く伝承します

Cars that blazed the trail in the history of Japanese automobiles are selected,
registered at the Hall of Fame and are to be widely conveyed to the next generation.

スズキ アルト

SUZUKI ALTO

スズキアルト

機能を優先し、直線を基調にシンプルにまとめられた2ボックススタイルのアルト。発売当時の全国標準現金価格は47万円。

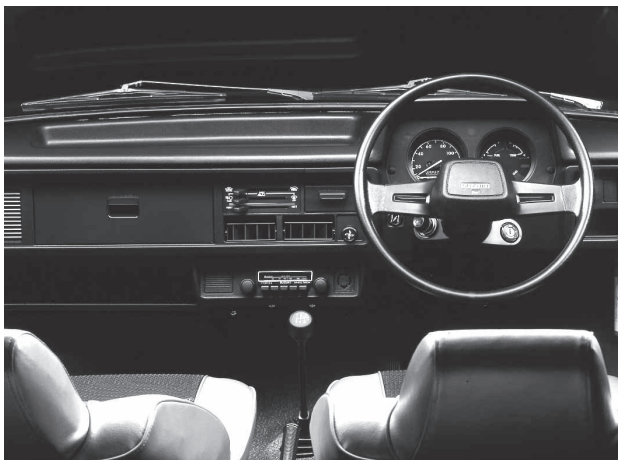
スズキ アルト(1979年)主要諸元

全長	3195mm
全幅	1395mm
全高	1335mm
ホイールベース	2150mm
トレッド(前)	1215mm
(後)	1170mm
車両重量	545kg
タイヤサイズ	5.00-10-4PR ULT
最小回転半径	4.4m
最高速度	―km/h
乗車定員	2(4)名
登坂能力	26.5°

型式	H-SS30V
エンジン型式	T5B型
駆動方式	前輪駆動
エンジン	2サイクル水冷3気筒ガソリン
ボア×ストローク	61.0×61.5mm
総排気量	539cc
圧縮比	7.0
最高出力	28ps/5500rpm
最大トルク	5.3kg-m/3000rpm
変速機	前進4段 1～4フルシンクロ 後退1段 フロアチェンジ
価格	47万円(全国標準現金価格)

リアのハッチは荷室床面から大きく開き、可倒式リアシートと相まって200kgの積載量が確保されている。

FF 機構により、平らな床面を実現し、前席シートはリクライニング式であった。



運転席まわりも、無駄のない機能に徹した直線基調で、ラジオや時計等もオプションであった。

1970年代に入るとわが国のモータリゼーションは急速に進展してマイカーが普及し、女性ドライバーも増えていった。小型乗用車の販売台数はオイルショックの影響はあったものの、1975年の253万台から1978年には262万台と回復し、保有台数も着実に増加していった。

その一方で、軽自動車の販売台数は足踏みを続け、保有台数は逆に減少していった。その背景には排ガス対策や安全基準適合のため小型車との価格差が縮小しその魅力が薄れたこと、軽自動車にも車検制度が導入されたことも大きかった。さらには、“軽自動車不要論”までささやかれるに至った。

こうした中で、軽自動車を主力製品に据えていた鈴木自動車工業(現・スズキ)は、排気量550ccへ拡大の規格改正に対応した新商品を開発すること、そこでは女性ドライバーにターゲットを絞るとともに、低価格で訴求することで逆境からの克服を図った。低価格化の方策の一つは、商用車規格であるボンネットバン(ボンバン)仕様とすることだった。当時の商用車は物品税がかからず、その分、売価を安くできる。社内には疑問視する声もあったが、「区分はあくまで統計上の都合。女性客のほとんどはそのことにこだわらない」という判断のもと、商用車規格でありながら、乗用車スタイルの車という開発構想がさらに進められた。役員、管理職は毎週土曜日に泊りがけで議論し、構想を煮詰めたという。

目標価格については「45万円以下」が掲げられた。＜価格マイナス利益イコール原価＞の考えのもと開発部門、生産部門で、コストダウンの方策が議論され、試行錯誤が繰り返された。工程、部品点数は最小限にまで減らされ、ムダや飾りは切り捨てられた。工場では工程の合理化、材料の有効利用など細部にわたって方針が打ち出され、協力工場にも指導の手が広がった。

1979年5月、初代アルトは発表された。2サイクル3気筒550ccエンジン搭載の2ドア・リアハッチ付のFF(前輪駆動)車で、直線を基調としたシンプルなデザインであった。FFの採用は、客室・荷室スペースの確保に寄与した。ラジオ、時計等はオプション設定というモノグレードであった。価格は47万円と発表された。

当初目標の45万円は上回ったものの、当時の軽乗用車は65万円前後が多く、50万円の大台を切る価格に発表会場はどよめいた。また、これを機にスズキは価格体系を見直し、全国統一価格を打ち出した。低価格だけに一定の量を売らなければ利益は見込めない。当初は月販売台数5千台を計画したが、人気は予想を大きく上回り、発売初月の5月から1万8千台の受注がよせられ、その後も爆発的な売れ行きを見せた。

こうした市場の評価に軽自動車メーカー各社も追随し、低価格で乗用車のように使えるという同じコンセプトのボンバンタイプの軽自動車を相次いで発売した。この結果、軽自動車市場は息を吹き返し、新車販売台数、保有台数とも急激に伸びた。4台に1台は軽自動車となり、第2の軽自動車ブームとも言われた。

ターゲットとした女性ユーザーも、発売当初は4人に1人であったが、2年後には2人に1人にまで拡大した。また発売時はMTのみであったが、後に2速ATを追加している。軽商用車もその後は物品税の対象となったが、アルトが切り拓いたボンバンのジャンルはユーザーに広く受け入れられた。1990年代に入るとトールワゴン系モデルが人気を集め、軽自動車はさらに隆盛を極めることになる。

初代アルトは、今日の軽自動車の地位を確かなものにした歴史的名車と言えるのである。

(日本自動車殿堂　研究・選考会議)